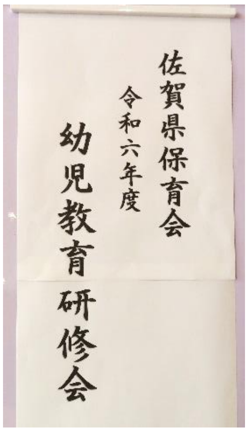


『令和６年度幼児教育研修会』報告書

【期日】 令和７年１月２３日
【会場】 佐賀県社会福祉会館　２階　大研修室
【主催】 佐賀県保育会
【参加者人数】 ８９名　（集合　４３名　　オンライン　４６名）
【内容】 研修１　１２：３０～１６：３０
「AI 時代の保育者の専門性」
講師　湯地　宏樹　氏
（鳴門教育大学大学院　学校教育研究科　高度学校教育実践専攻　幼児教育コース　教授）

～はじめに～

先進国子ども幸福度世界ナンバー６の豊かな国日本であるが、子どもの貧困は４４・５％。自殺率においては世界１位で小・中・高生の児童生徒の５００人以上が自殺によって命を落としているというのが今の日本の状況である。子どもたちが今を幸せに過ごせるために。１０年先の未来がどうなっているか誰にもわからない AI 時代を生きる子どもたちに今大切なこと、今育てなければいけない力はどんなことなのか考えていきたい・・・・

１・子どもが「主体」の保育

育みたい資質・能力について

知識及び技能の基礎（わかった・できた）思考力、判断力、表現力等の基礎（こうすればいい・このほうがもっといい）学びに向かう力、人間性等（頑張るぞ。やってみよう。面白そう。不思議だな）がＡＡＲサイクルを回すことによってコンピテンシーが育つようになる。

そのために必要なのは充実したあそび。保育者があそびの中で、子どもがやってみたくなるような夢中になれる環境をつくり、あそびのなかで生まれる小さな不思議や面白いに気づけることが大事である。
（センスオブワンダーのある保育者であってほしい）

・失敗しないようにする保育になってはいないか？
・すぐに答えをださない。どうやったらいいかな～を一緒に考える（振り返り、考え・繰り返しやってみる力）
・自己決定するのは子ども。（自分が選んで決めたことは前向きな気持ちにつながる）
・失敗することによってどうすればよいか考える。考えて工夫するからできるようになる。これが大事
・先生の為。保護者の為になってしまうのでプロセスを具体的にほめるといい、ほめすぎは逆効果になることもある。

「遊びひたる」について

遊びこむことが重要→ではどうやったらあそびこめるのか？＝フロー状態にあること

フローとは、挑戦課題と技能が高いところで釣り合っている状態（夢中になり熱中しているが最適状態）

そのポイントはちょっと難しく失敗する位のあそびを楽しむこと。

だが、特に難しいのは自己肯定感が低く、やればできるのにやろうとしない子の対応。成功体験を重ねていけるよう、一人一人の特徴に合わせた関わりをもつことが大事。（安心・安全の土台が挑戦につながる）

↓

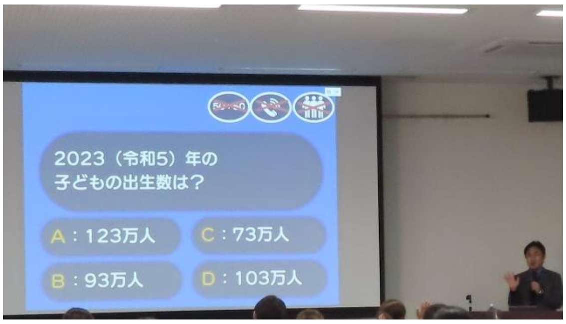
発達の最近接領域

「遊びひたる」ための環境の条件

一人一人の最適状態に応じた「くつろぎ」の環境　＊安心感、自由感＊時間、空間の保障

最適状態の確率を増やす「いきいき」の環境＊精進感、達成感、効力感など＊選択的環境と応答的環境

許容的・支持的な人的環境・風土＊友達と保育者の援助＊結果より経過



2・子どもが「主役」の保育

共感と共鳴の違いは何？

共感・・保育者が子どもの心に寄り添う。（アウトプット）

共鳴・・保育者が子どもの心の響きを聴くこと。共振。（インプット）

そういった関係になるよう、保育者は子どもの状況、変化にあわせ、一瞬一瞬立ち位置を変え、押したり、引いたりしながら関わっていくことが大切。

3・子どもが「主語」の保育

保育者と子どもの関係性は

保育者（意図的・育てる）

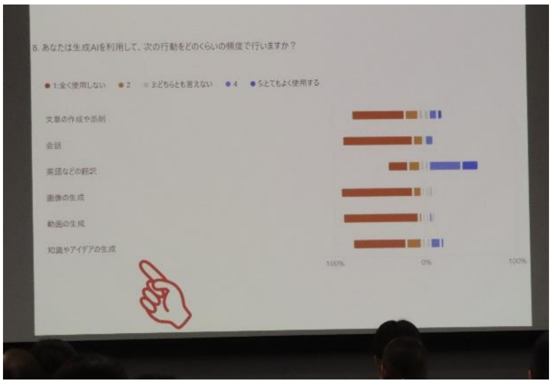
子ども（主体的・育つ）

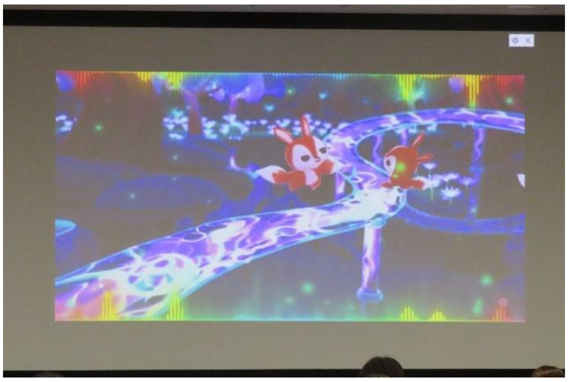
であるが、保育は「する」ものではなく「なる」もの。保育者は見通しをたて、行動し、振り返りをしながら毎日の保育をすすめていくが、コントロールできないのが子どもたち。共に育て、学びあい、子ども**と**つくる保育をめざしたい。

～自ら育つものを育てようとする心。世にこんな楽しいことがあろうか。

生える力。伸びる力。それに驚く心がなくては自然も子どもも、ほんとうには分からない。子どもの力に絶えず驚きながらこまかい心づかいに忙しいのが保育であり保育者である。～

倉橋惣三『育てのこころ』引用





AI とともにすすめる保育

AI の文章生成能力や音楽生成、画像生成の能力、スピードは人間が行うよりはるかに優れている。AI が得意としている左脳的部分（保育でいう指導計画、日誌などの作成・写真の処理など）は有効的に活用し、本来保育士として一番重要である右脳的部分（感じとる、あたたかなまなざし）に費やす時間を増やしてほしい。近年、AI の技術は日々進化していて、反射的答えだけでなく、じっくりと考えて答える保育者の思いにそったプログラムを提供できるようになってきた。AI の活用は保育者のゆとりや働き方改革にもつながっていくことを知ってほしい。

【感想】

湯地先生のあたたかいお人柄を感じながらこれからの保育について考えさせられた研修会でした。AI が進歩しても、心を通わせ、子どもと関わっていけるのは保育者だけ。日々子どもの発見、喜び、できた！を感じとり、ともによろこびあえる保育者でありたいと改めて思いました。また、AI 技術を有効的に活用することが、保育者の働き方、子どもへのていねいな関わりの時間につながることは十分に理解できるのですが、まだまだ苦手意識が勝るのが現状。いかに取り組みやすいようハードルを下げていくことがこれからの課題です。

（文責：下宿保育園　川原夏枝）